

看板娘ですっ！

目次

看板娘ですっ！

5

つなぐ思い出

235

看板娘ですっ！

鮮やかな青みを帯びた紫の生地に、白で描かれた菖蒲の花が生き生きと咲き誇る。

そんな暖簾を掲げた小さな割烹料理屋。その店の前を通りかかれば、誰もが一度は足を止めるだろう。趣きのある構えが醸し出す和の情緒は、少し先にそびえ立つ鬱蒼としたビル群を忘れさせてくれる。

「凛ちゃん、これ紅梅の間、持ってってな」

「はいー!」

元気で快活な返事が響くこの店は、その名も『菖蒲』。女性二人が切り盛りしている小さな割烹料理屋である。

割烹料理屋というと、敷居の高さを感じ、足を踏み入れるのに躊躇してしまうかもしれない。

しかし、『菖蒲』の料理は絶品だという口コミが広がり、店内は毎晩のように客の笑い声で溢れ返っていた。

カウンター席の他に、座敷の個室が二部屋用意されており、いずれも居心地のいい空間となっている。また、女将が関西美人だという事も人気に拍車をかけていた。

「失礼致します」

女性店員が、膳を持って個室の一つである『紅梅』の襖を開いた。お客からは「おっ、待ってました!」との威勢の良い声がかかる。膳を出すと、お客たちがそれぞれに色めき立ったのを肌で感じた。

「どうぞ、ごゆっくりお過ごし下さいませ」

綺麗な正座をして頭を下げると、彼女はゆっくり襖を閉めた。途端に向こうからはしゃぎ声が聞こえてくる。お客の楽しげな様子に、満たされたような笑みを残して、彼女はカウンターへ戻った。すっと伸びた背筋、無駄のない美しい所作。黒髪で身長は低く、着物が身体に馴染んでいる。その若女将とも見える佇まいは、彼女の努力のたまものだった。

鈴木凛は高校を卒業したばかりの十八歳という若さで、ここに身を置く事になった。五歳の時に父親を亡くした後、女手一つで育ててくれた母親が、十七歳の時に病気で亡くなったからだ。そこで声を掛けてくれたのが、女将である上条あやめだった。

女将は母親の親友で、小さい頃から面識があり、歳の離れた姉のような存在だ。装いはいつも着物で、艶のある長い黒髪をかんざしで結い上げている。妖艶な赤い口紅が、透き通るような真っ白い肌に映える。その立ち姿はまるで昔の日本映画から飛び出してきたようで、凛は女将に憧れを抱いていた。

そんな女将からの誘いを喜んで受け入れ、住み慣れた土地を離れた。住み込み店員として、この店でゼロから始めたのだ。

凧は女将おかみのような巧みな話術もなく、色気も足りない。まして包丁もほとんど持ったことがなく、働いた経験もなかった。けれど、女将は一から十まで丁寧な仕事を教えてくれた。凧は、信頼に込めたい、と身を粉こにして働き、なんでも吸収しようと女将の話を全身を耳にして聴いた。頑張ればその分やれる事が増え、楽しさも増すと気付いてからは、より一層仕事が楽しくなった。

あれから五年。ようやく余裕が生まれた事で、凧は、周囲がよく見えるようになった。客が何を求めているのか、店はどう応えれば良いのか。『菖蒲』の看板に恥じぬ料理、接客、サービス。曖あい昧まいだったその基準が理解出来るようになった。

割烹料理屋と言っても、そこまで格式ばった店ではない。ガチガチに固めた対応ではなく、どこか一本緩みのある物腰が『菖蒲』の持ち味だ。

「あら。嫌ですよ、社長。うちをひいきにして下さらな」

「ハハハ、女将にそう言われると敵たなわないな」

女将はいつもの濃艶のうえんな接客と、流れるような関西弁で男性客を虜とりこにしている。きつい印象を抱かぬがちな独特のイントネーションも、声色を巧みに操あやつる事で柔らかな音に変わるのだ。

凧には決して真似出来ない、女将の独特の接客スタイルだった。けれど、凧にも胸を張って提供出来るものがある。

「凧ちゃん、だし巻きの注文入ったよ。お願いね」

女将の声に、カウンター席にいた男性が凧を見てにこりと微笑む。注文したのはこの男性らしい。「はい！」

凧が快活に返事をする、女将は「ふふ」と口元くちもとを綻ほころばせて、誇らしげに言う。

「うちの看板娘なんですよ」

「ほー」つと男が興味津々で凧を見た。急に恥はずかしくなった凧は、それから逃れるように足早に板場と店舗を仕切る暖簾のれんをくぐる。

全然看板娘なんかじゃないですよ！

『菖蒲』特製の京風だし巻き卵は、凧が唯一腕に自信を持っている一品だ。初めて女将に本格的に教えられた料理が、だし巻きだった。今ではその努力が実り、だし巻きに関しては凧に一任されている。その味は中年以上の男性客にいたく受けが良く、舌の肥ふえたご老体うなをも唸うならせるまでになっていた。

今や店の看板メニューと言って過言ではない——女将がよく凧を「看板娘」として紹介する時に使うフレーズである。

だが凧としては、だし巻きを褒められるのは嬉しいが、「看板娘」と呼ばれるのには恐縮おそくしてしまふ。

女将にあつて凧にないものは多い。接客術はもちろん、所作や女性としての色気、料理の腕も遠く及ばない。今は女将の侍女じしよぐらいの位置づけで満足だ。

「またのお越しをお待ちしております」

凧は、本日最後のお客を店先で丁寧なお辞儀と共に見送る。客の後ろ姿が見えなくなると、店の暖簾のれんを下げた。

店の営業時間は十八時から二十四時。近くにあるオフィス街からやってくる仕事帰りのサラリーマンを見込んで、この営業時間になっている。

ただ、終電が近付く二十三時には、大体のお客は帰ってしまう。残るのは、迎えの車が用意出来る社長や役員、あとはホテルで夜を明かそうとしている男女だ。今のお客も、仲睦まじい様子のカップルで、指と指を絡めて静寂の夜に消えて行った。

「凜ちゃん、お疲れさん」

暖簾を持つて店に戻ると、カウンターの内側にいる女将から声を掛けられた。カウンターは褐色のすじが入った薄黄色の木目調で、高級感を漂わせている。その中にいる女将は、高級料亭の女将と言っても遜色ないほど気品に溢れていた。

「今日もいっぱいでしたね」

「ほんまやわー」

そう言いながらも、互いの顔は綻んでいる。不況の波もこの店にはどこ吹く風。本日もたくさんのお客に恵まれ、店の商売は極めて好調だった。忙しいので休憩はなかなか取れないが、何とか二人で回している。

「せや、また個室の予約入ったよ」

「え!? またですか!? 一か月待ちなのに!？」

驚きの知らせに、凜はカウンターの中に入り、女将の手元にある予約名簿を見た。

一か月先の予約名簿の中には、予約者の名前と電話番号、それから名刺が貼り付けてあった。

二部屋しかない個室は人気で、一か月先まで予約は埋まっている。予約客が早めに帰って、その後の予約がなければ利用することも可能だが、それもごく稀で、もし入れたら非常にラッキーだろう。

「一か月待ちになりますけどええですかー、って聞いたら二つ返事で、構いませんよ、やて」

「名刺を頂いたということは、接待ですかね」

「また追ってご相談させてもらいます、って言っただけだし、接待やろうなあ」

女将は顎に手を添えて、話をした時の事を思い出しているようだった。

店の奥にある個室は、カウンターの喧噪が届かないようになっており、その静けさから接待によく利用される。

ちなみに、接待客の大半はコース料理を注文する。その中に接待相手の苦手なものが含まれていたら、それを別メニューに切り替え、逆に欲しいものがあれば付け加えるといった対応もしていた。多分、相談の内容というのはそれだろう。

「忘れるとこやった」

そう言っただけ、女将は思い出したように懐から茶封筒を取り出した。

「はい、今月のお給料」

「ありがとうございます!」

差し出された封筒を受け取り、凜はぺこりと頭を下げた。

「今月もありがとうね」

「とんでもありません」

女将の労いに恐縮して、凧は首を振った。

女将と凧は売れないこの店の給料は、古風だが手渡しされている。金額はその月の売り上げによるが、女将は売り上げが悪くても必ず一定の金額を凧に渡す。ここしばらく店の売り上げが好調なので、凧は以前よりも多めの給料をもらっていた。

「いつも通り仕入れはやつとくから、明日はどっかお買い物でもしてき」

「あ、はい！」

「ほんなら、二階上がってご飯にしようか？」

二人は、店内の照明を消して板場奥の階段を上がる。淡い琥珀色の間接照明が満ちる店内とは違い、二階は生活に適した白の明るい蛍光灯が照らしていた。この店は、店舗兼自宅になっていて、二階が居住スペースとなっている。廊下を挟んで左の襖が女将の部屋、右の襖が凧の部屋だ。

多忙を極める中でもきちんと休みは与えられている。仕込みは言うまでもないが、仕入れ、在庫管理も全て行っている女将は、定休日である日曜日さえも休む暇がない。だが、凧にはきっちり休みを取らせ、しかも給料日の次の日は昼間の仕事を休みにしてくれた。

「お店の残りのマグロがちょっとあるから、簡単に鉄火丼にしようか」

閉店した後は、廊下の奥にある台所で、二人並んで夜食の準備を進める。もう献立を決めていたらしい女将はさくさく取り掛かった。

夜食はいつも店の残り物で作る。と言っても、女将の目利きで直々に仕入れる食品は、どれも一

級品。そして作り手も一流となれば、食材が残り物でも、れつきとした『菖蒲』の割烹料理となるのだ。

「あやめさん、一緒にだし巻きもどうですか？」

営業が終了すれば、女将の呼び方も名前に変わる。ちなみに、店名は女将の名にちなんで付けられたものだ。

「作ってくれるん？　じゃあ、お願いしてもええ？」

「もちろん！」

「凧ちゃんのだし巻きがいつでも食べられるって、幸せやわ」

仕事の疲れを感じさせない凧の様子に、女将は笑みを零す。

女将は凧の作るだし巻きをいたく気に入っており、好きなものは何かと聞かれたら、必ず凧のだし巻きを挙げるほどだ。

出来上がった夜食は、刻み葱と刻み海苔が乗った鉄火丼に、だし巻き。それに人参、ゴボウの入った味噌汁。鉄火丼にお茶を入れれば、お茶漬けも楽しめる。料理屋に行けば、そこそこ値が張る定食だ。

足繁く通うお客がいる中、自分のために毎日作られるこの料理。凧がちょっとした優越感に浸ってしまいうのも無理はない。

「じゃあまた明日もよろしくね」

食事を済ませ、交代で入浴したら揃って就寝。寝る前のこの挨拶も慣例化したものだ。

寝間着も浴衣という女将は、まさに和風美人。凧は毎日ぼうつと見つめてしまう。女将は、凧の一番身近にいる、一番の懂れの存在だった。

「凧ちゃん？」

「あ、はい！ 留守にしますが、夕方までには戻りますので！」

我に返って律儀に頭を下げる。一緒に暮らしていても、凧は女将に対して礼節を忘れないようにしていた。

「ありがとうね。ほんなら、おやすみ」

「おやすみなさい」

女将にもう一度お辞儀をし、凧は自室の襖を開けた。

畳の部屋の中央に敷かれた布団は、凧がお風呂に入っている間に女将が敷いてくれたものだ。他には小さなテーブルと、その上に卓上ライト、それから少し大きめのぬいぐるみが二体ある。二十代の女性にしてはあまりにもシンプルな内装だ。

入ってすぐに、照明からぶら下がった紐を引いて電気を消し、豆球を点けた。パジャマ姿の凧は、身体を布団に捻じ込み、目を閉じる。

年頃の女性としては今一つ面白味が欠けている日々だったが、これが彼女の日常だった。

次の日。半休をもらった凧は、電車を使って店から少し離れた百貨店に来ていた。

「うわあ！ やっぱり素敵！」

首のないマネキンを前に反射的に大声を漏らしてしまい、凧は慌てて手で口を塞ぐ。

周囲を窺うが、皆変わらずに買い物を楽しんでいるようだ。そっと胸を撫で下ろした凧は、マネキンに視線を戻す。

ああでも、やっぱり素敵……！

眼前のマネキンが着ているスーツに目を輝かせながら、再び同じ賛辞を心の中で贈った。

ブラックスーツに、赤と紺の太い斜めストライプのタイが、首元をお洒落に演出している。中のシャツも幅が細い赤のストライプだが、襟だけが白いクレリックシャツなので、きつい印象には見えない。

凧は、とにかくスーツが好きだった。スーツを着た男性——ではなく、スーツ自体が異常に好きなのだ。

この紳士服売り場のマネキンコーディネートはレベルが高い。背広とスウェット、そしてシャツとネクタイの組み合わせがどれも秀逸。大手百貨店だけあって、揃えている品も一流だ。それを上手く着こなす術も心得ている。

凧は眼福を得て満面の笑みを浮かべた。良いスーツの見分け方、というのを以前この店の店員から聞いたのだが、まずは首回りを見るらしい。襟が吸い付くように首にフィットしているか、次に袖口にゆとりがあるかがポイントとの事。丁寧に話してくれた店員に、買うわけでもないのになんとうんと頷いてしまったのは記憶に新しい。

しかし、一つだけマネキン相手では叶えられない事があった。

凛はもう一つのお気に入りのお場所へ向かう。そこは百貨店からそう遠くない、オフィス街だ。そこで、すれ違うスーツ姿の男性を、じっと観察する。端から見ると怪しい女かもしれないが、決して不審者ではない。ただ、動いているスーツを見たいだけだ。

ああ、あのスーツ素敵だなあ……

見れば、携帯片手に走り去る男性——いや、スーツが目に入る。忙しそうにしている男性の動きと共に伸縮する生地は、まるで脈動しているかのように美しい。言うまでもなく、凛の眼中に男性の顔はない。

やっぱり、スーツはこうでなくっちゃ!

マネキンのスーツも綺麗だが、それだけではつまらない。やはり、汗水を流しながら会社のためにひた走るその姿こそ、スーツの真の価値を引き出していると言えるだろう。

声には出さないものの、心の中で目一杯の黄色い声を上げて歩いた凛は、オフィス街の中央部にある広場に来ていた。ベンチが多数設置されており、中央には噴水がある。お昼時は弁当を持参したOLたちで賑わうのである。

広場にもスーツ姿の人がちらほらいた。鳩に細かくしたお菓子をばらまいている男性や、ベンチに腰掛け背広を脱いで肩を落とす男性もいる。

何か仕事で辛い事があったのかな。

中身には興味がないものの、スーツをまとう人間からその人の人生が垣間見えると気になる。

そんな広場の一角を何気なく通り過ぎようとした凛だったが、途中で思わずある場所を二度見し

てしまった。

靴が……落ちてる?

植え込みの端から靴の先が飛び出しているのだ。少し近づいて目を凝らすと、それは茶色の革靴だった。でも何故か、底が上を向いている。

どうしてこんな所に革靴が、とゆっくり植込みの裏に回り込んだ凛は、ぎよつとした。

スーツの男性がうつ伏せで倒れていたのだ。

突然現れた漫画のような情景に、身体が硬直する。

死ん、でる……??

倒れている男はピクリとも動かない。しかし、見る限り外傷もなかった。

もしかして事件——あるいは病気なのかもしれない……

凛はハッと我に返った。

急いで駆け寄り、男の頭付近にしゃがむ。ここは植え込みの死角になっているので、倒れていてもなかなか気付かれないだろう。

「大丈夫ですかっ!?!」

「んっ……」

声に反応したのか、男が少し身じろいだ。とりあえず死んではないようだ。

凛は、ふと気付いた。この男の着ているスーツが、ありふれたスーツではない事に。

鈍色の生地に細いストライプのデザインが入ったスーツは、寝ているにもかかわらず、着崩れし

ていない。そして見ただけで分かる、光沢のある質感。しかも、この男の身体にピツタリ馴染んでいることから、これはオーダーメイドスーツだ。それも、恐らく七桁はくだらないだろう。それが分かったのは、長年のスーツ観察経験からだ。

しかし、何故こんな超高級スーツが行き倒れているのか。こんなスーツを着る人間だ、余程の金持ちのはず。それに、空腹で命を落とすような時代でもない。であれば、重い病気で、今まさに生死の境を彷徨^{さまよ}っているのかもしれない。それくらいしか凛には考えつかなかった。

「大丈夫なんですか!？」

もう一度声を掛けると、男は枕代わりになっていた自分の腕から少しだけ顔を動かし、くぐもった声を出した。

「……何？ 朝？」

男はそう訊^きねるが、太陽は真上で眩^{まぶ}しい光を注^{そそ}ぎ続けている。間違えようもなく真^まつ昼間だ。

間の抜けた質問に、凛は脱力してしまう。

「身体……大丈夫なんですか？」

「眠い、もうちよつと……」

今、なんて言ったの？

耳を疑う言葉だ。命の危機まで考えたというのに。男の呑気な反応に拍子抜けすると、沸^{おち}々^と苛立ちが込み上げてきた。綺麗に舗装されてはいるが、冷たいコンクリートの上だ。間違っても、寝転がるような場所ではない。

「ここ、オフィス街のど真ん中ですよ」

「ふーん、そうなんだ……」

寝ぼけているのかいないのか。凛の言葉を全く意に介さず、まるで他人事のようにそう言った男は、あろう事か寝返りを打った。布団の上にいるかのごとく、恐ろしく自然に身体を仰^{あお}向けにしたのだ。凛は慌てた。

ちよつと待って！ こんな所で、そんな高いスーツで寝返り打たないで！ スーツが泣く！

もはや、気にしているのはこの男の体調ではなく、この男の着ている超高級スーツである。

「ああ、あ、あの！ ここで寝ると色々差し障^{さし}りがあると思うのですが！」

赤の他人に、部外者が出来る目一杯の批判を投げつけた。

男性をスーツのマネキンぐらいにしか考えていなかった凛が、これほど至近距離で異性の顔を見るのは初めての経験なのだが、今はそれを気にする余裕もない。

「何？ うるさいなー誰？」

男は唸^{うな}りながら、やつと目を開けた。その瞳は大きくキラキラしていて、凛は吸い込まれそうになった。まるで瞳が自ら光を集めているかのようだ。

「綺麗だ……」

凛は一瞬、自分が内心の思いを口にしてしまったのかと勘違いしそうになった。だが、これと言ったのは凛ではなく目の前の男だった。

「え？」

綺麗って……何が……

「こんな所にいらっしやったのですか」

その時、後ろから冷たい声でした。振り返ると、頭をムースできっちり固めた黒スーツの長身男が、すたすたと歩いて来るのが目に映る。

「藤川か……」

男は声だけで誰か分かったらしく、黒スーツの男の方を見向きもせずと言った。そして気怠そうなきで、無機質な地面から上半身を起こす。

「会議はもう始まっております。一体何をやっていらっしやるのですか」

藤川と呼ばれた男は、起き上がった男を静かに非難した。絶対零度を思わせるその口ぶりに、凛は背筋に冷たい物が触ったような気がした。

「どうやら、この黒スーツは目の前の行き倒れ男と知り合いらしい。

「何もやっていない。強いて言うなら寝てたかな」

「そういう事ではありません」

行き倒れ男がしれっと返すと、黒スーツも負けじと冷たく否定する。

しかし、仲が悪いというよりどこか信頼を感じさせるやりとりだ。

「爺は？」

「依然……」

「そうか、仕方がないな」

短い応答をしたのち、男はようやく立ち上がった。彼の身体のあちこちに砂粒やら埃が付いていて、凛は悲鳴を上げそうになる。

だが、立ち上がった男を見たら、今度は開いた口が塞がらなくなった。

男は、グレーのストライプの上下に、同じ生地ベストを着こんでいた。シャツは白で、ネクタイは黒よりも少し明るい無地。細身のシルエットが映えるその立ち姿は、これまで目にしたどの人よりも、あるいはどのマネキンよりも魅力的だった。中身の人間に興味のないはずの凛も、目が釘付けになる。

「ああ、すまなかった。起こしてくれてありがとう」

男はしゃがんでいた凛に自らの手を差し出す。

「いえ……」

凛が手を重ねると、男が一気に引き上げた。そして、「では」と短く言い、黒スーツの男と共に立ち去る。

まるで嵐のような邂逅だった。

凛は、頭にくつもの疑問符を浮かべたまま、しばらくの間その場で立ち尽くした。

よく分からない出来事があったものの、凛は予定通り夕方には『菖蒲』に戻った。

普段着から、浅黄に赤い梅の小花がちりばめられた着物に着替え終えると、その上に割烹着を身に付け、仕込みに入る。

凜の手元にあるのは、コース料理で出される天ぷら用のエビだ。下準備で殻を剥きつつも、凜は昼間に会ったあの男の事ばかり考えていた。

地べたで寝るなど、スーツに対する気遣いや礼儀が全くなくてない。スーツに対する冒瀆とも取れる。なのに悔しい事に、男は我が一部と言わんばかりに、颯爽とスーツを着こなしていた。

ただ、残念だったのは、男の立ち姿と大きな瞳は脳裏に焼き付いているのに、顔が全く思い出せない事だ。商売柄、人の顔を覚えるのは得意なはずなのに、すっかり抜け落ちていく。凜の頭の中の男は、まるで……そう、顔のないマネキンのようなだった。

覚えていたからといってどうするつもりもないのだが、あれだけ高級スーツが似合う人間を忘れてしまうのは、なんだかもつたいたい気がする。

うーん、どんな顔だったっけ？

首をひねって思い出そうとしても、漠然としたイメージすら浮かんで来ない。

「凜ちゃん、どないしたん？ さっきから上の空やわ」

横で魚を捌いていた女将が凜の顔を覗き込んできた。

「あ、いえ、すいません。何でもありません」

女将は凜の様子を気にしていたが、それ以上追及する事はなく、話題を変えるように本日の予約客の話始めた。

「今日の青藤の予約のお客さん、若い社長さんの集まりらしいよ」

『青藤』とは『紅梅』と対になる個室の名称である。それぞれの個室は名前にちなんだ内装となっ

ており、『青藤』には淡い青で描かれた藤の掛け軸が飾られ、『紅梅』には花卉が赤で描かれた梅の掛け軸が飾られている。

「若い社長さん？」

「そう。新進気鋭の社長四人組らしくて。コースで注文してくれてはるんやけど、お酒はあまり飲まへん言うてはったから、追加の料理注文ぐらいしか言っただけはらへんと思う」

「分かりました。でも、珍しいですね、若い方が飲まないって」

「なんでも、仕事の話が主になるから、素面の方が良いって話やったわ」

若社長が四人揃ってする仕事の話とは、一体どんな内容なんだろう。

少し興味が湧いたが、ここは客商売。何を見聞きしても、客のプライバシーには一切かわらないのが鉄則である。そんな事よりも、凜はもっと別の事が気になっていた。

もしかしたら、すっごく良いスーツが見られるかもしれない。

凜はそんな期待を抱きながら、開店準備に取り掛かったのだった。

「いらつしやいませ」

その夜、暖簾をくぐって入って来た三人のお客を一目見て、すぐに凜は気付いた。一人足りないが、これが例の青藤のお客だろう。

若いとはいえ、洗練された雰囲気があり、やはり一般人とは一線を画するようなオーラを発している。着ているスーツが揃って上質な高級スーツであるところも、凜が確信した要因だった。目移

りしてしまいそうなくらい、どれもこれも格好良い男性……いや、スーツだ。

「すみません、本日予約させて頂いていた者ですが」

中でも一番上品そうな、眼鏡を掛けた男が、代表してそう言った。

「ありがとうございます。お部屋のご準備はさせて頂いております。こちらへどうぞ」

凜は、入り口から向かって右側通路に客を案内する。

『菖蒲』の店舗内部は、まず引き戸の入り口から入って真正面にカウンター席。そこから右側の廊下を進むと『青藤』、左側に行くと『紅梅』となっている。部屋同士が離れている上、壁も防音材を使用しているため、他のお客に話を聞かれる心配はない。それもこの小さい店が接待に利用される理由である。

短い通路には下から照らすオレンジの間接照明が使用されており、その淡い光は歩く者を別世界へと誘う。また、壁にある窪みには、気高く咲く菖蒲を活けた花瓶があり、短い移動距離でもお客を退屈させない工夫が施されていた。

『青藤』は、石畳の床の上から一段上がったところにある。そのため部屋の前で靴を脱いで一段上り、襪を開けて入室するのだ。

ちなみに、配膳、下膳の際も一度履物を脱がなくてはならない。その場合、上り框に一度お盆置いてから両手で襪を開く。上り框から襪まで空間を広くとってあるのはそのためだ。

三人の客はそれを理解しているのか、躊躇なく靴を脱ぐと早速とばかりに部屋に入った。

「あ、そうだ。もう一人遅れて来るのですが、大丈夫でしょうか？」

部屋に一步踏み入れたところで、眼鏡の男が凜に訊ねた。

「かしこまりました。お連れ様が来られたら、ご案内させていただきますね」

「どれぐらい遅れるって？」

そう発したのは、茶髪のツンツン頭が特徴の男だ。ホストと見まがうくらいのキラキラした雰囲気醸し出している。

「さあ……でも何か問題が起きたらいいつつから、一、二時間はかかるかもしれませんね」

茶髪の男の質問に答えたのは、くせつ毛のパーマが目につく、三人の中で一番若そうな男だった。

「……断定は出来ませんが、それぐらいになると思いますので」

眼鏡の男がそうまとめ、凜に改めて声を掛けた。

「ご配慮ありがとうございます。では、お食事は先に三名様分お持ちさせて頂きます」

「お願いします」

凜は頭を下げて部屋を出た。

一時間ののち、黒いストライプスーツの男が来店した。入り口が開いたのを見て、凜はカウンターから出る。

「いらっしやいませ」

今日はストライプスーツに縁のある日だ。そう思いながら入り口に駆け寄った凜は、動きを止めた。そこにあったのは、昼間見た漆黒の瞳だった。

「予約の……」

そう言いかけた男も同様に動きを止めた。二人を静寂が包む。

この人……広場で倒れてたあののかな？ でも、まさか……

昼間の男と同一人物かどうか疑問だったものの、あの印象的な瞳と、高そうなスーツを完璧に着こなす男のフォルムは記憶のままだ。

記憶から抜け落ちていた顔立ちは、よく見れば整っていて、スーツの高級感と同じくらい品がある。

そっか、身体付きだけじゃなくて顔立ちでもスーツの魅力を引き出しているんだ。だからこんなスーツが似合ってるのかもしれない。

一人スーツ分析に浸り、脳内でふむふむと頷き納得する。凛はつかの間、仕事である事を忘れて男の顔を凝視していた。

「凛ちゃん？」

怪訝な様子で声を掛けたのはカウンターにいた女将だ。客の顔をじっと見つめたまま立ち尽くしている凛を不思議に思っただろう。

「あ、すみません！」

凛はその声で我に返り、気まずそうに視線を足元に逃がす。仕事なのに、つい、思考がスーツに傾いてしまっていた。

「お、お連れ様ですね。こちらへどうぞ」

凛が営業スマイルを浮かべ直して、男が後に続く。

短い時間とはいえ、移動時間の沈黙がとても居心地悪く感じる。

凛は昼間の男だという確信を得たいと思ったが、なんと声を掛ければ良いのか分からなかった。

まさかこの場で「あの時行き倒れていた人ですか？」などと、失敬千万な質問をするわけにもいかない。

「おっせーぞー」

「すまない。ちょっと長引いてな」

ツンツン頭の非難に軽く謝罪しながら、男は若社長の輪に加わる。

以降、追加注文を受けて何度か社長四人のいる『青藤』に上がったのだが、凛から話しかける事はなかった。気になつてはいたが、今は店員と客の関係であるので、そこから一步踏み出せなかったのだ。

そうして閉店三十分前。凛は、結局男に声を掛けられず、社長四人組のお会計を済ませた。

男が送っていた熱い視線に気付かないまま。

* * *

閉店時刻が深夜零時なので、必然的に凛が眠りにつけるのは深夜二時を回る。だが、鮮魚を直接市場で仕入れているこの店の朝は、一般企業の社員たちよりも早い。朝六時に起床し、店の小さなワゴン車を走らせて、早々に魚市場に出掛けて行くのだ。凛も眠気と戦いながらそれに同行し、

女将の仕入れを手伝っていた。

早朝の空気というのはすがすがしいものだが、市場の空気はそれに加えて活気がある。潮の香りに乗って、市場ではないなせな男たちの声が飛び交うのだ。それに刺激されて、寝ぼけ眼の凜も一気に覚醒する。身体にまとわりつく魚の青臭さもまた一つの味で、決して嫌いではなかった。

市場に入れば、仲卸業者が血気盛んに動き回っている。加えて、凜たちと同じような小規模店舗や小売店、スーパーなどの買い付け人たちが集まり、とても賑やかだ。

凜と女将は、発泡スチロールの箱に収まった鮮魚たちの間をすり抜け、行きつけの仲卸業者の所に向かう。すると、早速女将が、見知った仲卸業者に呼び止められた。

調子はどうですか、などと談笑しながら、女将が本日の入荷状況をそれとなく聞き出す。今日はどこどこ産の魚が良い、と店主が選りすぐってくれるものを女将が見極め、交渉を繰り返したのち、買い付けとなるのだ。マグロなどの大型の鮮魚ならば、その場で切り分けてもらいたい欲しい分だけを買っている。

「凜ちゃんも、毎日あやめさんについて来るのは大変だろう？」

ある店の店主が、凜を労わる。店主の心配りを凜は笑顔で受け止めて言う。

「いいえ、すごく楽しいですよ。皆さんとっても楽しそうにお仕事されていますし、見るだけでワクワクするので」

「へえ、嬉しい事言ってくれるねえ！ ほい、一つおまけっつと！」

気を良くした店主は、買い付けた量より少しだけ多く詰めてくれた。

「わあ、ありがとうございます！」

見知った仲卸業者ならば、こんな事もしばしばある。よくもらって帰るのは魚の頭だ。魚の頭は主に出汁として活用され、店の煮物や味噌汁に変身する。また、兜煮や粗煮にして二人の昼食や夜食メニューにすることもあった。

こうやって買い付けた鮮魚は、全部まとめて店まで送り届けてもらうよう、市場の配送業者を使っている。だから行きも帰りも手ぶらだ。

凜の一日はこうして市場から始まる。スーツフェチを抜けば、小さな割烹料理屋で真面目に働く看板娘なのだ。

「お待ちせ致しました。鳥貝のお刺身です」

凜は、カウンター席の客に、藍白の皿に盛り付けた刺身を出した。大葉の上に横たわるのは、二等辺三角形の上が黒く下は白い、一見奇妙な形をしたもの——鳥貝だ。これも市場で今朝買い付けしてきた。

「今日のおすすめです。珍しく殻つきで仕入れた上物なんですよ」

女将の言葉に中年の男性客はへえー、と感嘆した。そして、わさび醤油の皿に軽く浸し、口に入れてひと噛みふた噛みした後、「ん、甘いな」と唸る。

「鳥貝は食べた事があるが、もつとぐにやぐにやしてこんな甘くはなかったな」

「それが生と茹でたものとの違いなんです。うちでも生が入るのは稀なんで、お客さんはほんま運

がええ人です」

女将おかみが優美に微笑んだのを見たあと、男性はもう一つ口に運ぶ。

刺身を口にしてはうんうん頷く男に、他の客がその刺身皿をしきりに窺う。客の反応だけではこ
うはならない。女将がさりげなく会話に混ぜた「おすすめ」と「幸運」というキーワードが効いて
いるのだ。こういった女将の技術は凄い、といつも凜は思う。おそらく、今日仕入れた鳥貝とりがひはすぐ
に完売するだろう。

「いらつしやいませ」

二個目の鳥貝の注文が入った時、カラカラと引き戸の開く音がして凜はカウンターから出た。

「おっ、今日は空いてた〜」

お客は入って来ると安堵の声を漏らし、一つだけ空席だったカウンターに着くなり捲し立てる。

「とりあえず、だし巻き！ だし巻き下さい！」

今すぐ出せと言わんばかりの勢いに凜が面食らっていると、女将が笑う。

「あらあら、えらい気に入ってくれはって」

「ハハハ、すみません。すっかりハマっちゃったんですよ。甘くないだし巻きってこの辺には置いて
ないですから」

男が照れたように頭を掻いた。

この店で提供しているだし巻き卵は、関東で一般的な甘いだし巻きではなく、昆布と鰹節かつおぶしから
取った出汁だしで作る京風のだし巻きだ。関西出身のお客だけではなく、関東で生まれ育ったお客も、

気に入ったと言ってくれる人が多い。それだけを求めてわざわざ食べにくるお客もいるくらいだ。
「ありがとうございます。ほんなら、凜ちゃんお願いね」
女将にそう言われ、凜は板場に入った。

京風だし巻きと一般的なし巻きは、玉子の膨らませ方にも違いがある。関東のだし巻きは急
激な高温加熱で膨らませるが、京風だし巻きは出汁の水分によって膨らませている。故に、京風は
切ったときに出汁が溢れ出てくるのだ。出汁をどこまで玉子に留めていられるかが、職人の腕の
見せ所でもある。

よく溶いた卵に、あらかじめ用意し冷ましておいた出汁を加え、薄口醤油、みりん、塩少々で味
を調える。そしてだし巻き用の四角い玉子焼き器に薄く油を引き、型に卵を少しづつ分けて流し込
む。流し込んで巻くという工程を何度か重ねれば完成だ。

「あーやっぱりこれ本当に美味い！ 腕良いね！」

さらに一切れ口に放り込み、お客は幸せそうな顔をする。

「いえ、そんな……」

謙遜けんそんしながらも、凜は喜びを滲ませてはにかんだ。

それを横目に見ていた女将の朱色の唇も、柔らかに弧を描く。

凜がちらりと隣を見れば、女将が手際よく料理を仕上げていた。その無駄のない手捌きてまきには、毎
回惚れ惚れさせられる。

一息ついたところで、また一人お客がやってくる。出迎えようと入り口に向かい、そのお客の顔

を見た途端、凜は目を見開いた。

この人、また……

そこにいたのは、あの行き倒れスーツ男だった。

奇妙な事に、あれ以後この男は一人で『菖蒲』に来店するようになっていた。それも毎日。しかも酒は飲まず、カウンター席で二、三品小鉢を注文するだけで帰って行く。どうやら多忙らしく、よく携帯の呼び出しが掛かって帰ることが多い。滞在時間が十分にも満たない日もあった。

「あの、すみません。今、満席で……」

凜がそう言うと、男が店内を見回した。カウンターは先ほどだし巻きを注文したお客が入った事で、埋まっている。

「お待ちになられます？ よろしければ、お席が空き次第、連絡させて頂きますが……」

「あ、ではそれで……」

凜の言葉に頷きかけた男だったが、携帯が振動したようで、胸ポケットからそれを取り出した。画面を見た男の眉間に、わずかに皺しわが寄る。

「すみません。やっぱり帰ります」

「えっ」

言ったかと思えば、男はもう踵かかとを返して店を出ていた。慌てて凜は入り口を出て、男に声を掛ける。

「あ、ありがとうございます」

お辞儀をする間もなく、何とか礼だけ伝えると、男は振り返らないまま手を上げた。

あんなに忙しそうなのに、どうして毎日来てくれるんだろう……疲れてないのかな……

店を気に入ってくれているのは嬉しいが、体調が気になっってしまう。

そんな日々が二週間ほど続いたある日。閉店時刻である深夜零時れいじを十分ほど回った時、女将おかみが言った。

「凜ちゃん、そろそろ店仕舞いしよか」

「でも女将さん、この人……」

凜は気まずそうに答える。

実は、いつものように店仕舞い出来ない障害物が、カウンター席で寝ている。

凜の目線の先にはいるのは、例の高級スーツの男だ。本日のスーツはシンプルな薄グレーの上下に、黒のシャツ。グレーのスーツに黒のシャツが映えていて、毎度の事ながらセンスの良さに感心する。しかし、スーツの袖口に皺しわがついてしまっていて、残念な状態になっている。

彼は大体二十時くらいに来店するのだが、今日は二十三時という遅い時間に店を訪れていた。いつものように小鉢二品、そして珍しく日本酒と一緒に注文したのち、気が付けばカウンターに突っぶして動かなくなっていた。寝てしまったのだろう。平日の遅い時間であり、幸いお客の数も少なかったので、あえてそのままにしていたのだが。

とはいえ、さすがに閉店となれば起こすしかない。

「疲れてはるんかも分からんけど、起こすしかないやろうね」

「そう、ですよね……」

凜は苦笑いした。広場で倒れていたのを入れると、この男を起こすのは二度目だ。

静かに寝ている男の肩に手を掛け、凜は軽くゆする。

「すみませーん。もうお店を閉めますので起きて下さーい」

「……何？ 朝？」

夢うつつの男の言葉を聞くのも二度目だ。

凜は、またこの前のように覚醒するまで時間がかかるのかと構える。だが男は、顔を上げて凜の顔を認めた瞬間、飛び起きた。

その勢いに驚いて、凜は首を引つ込めた。女将も、「あら、起きはった」と声を漏らす。

男は、焦った様子で凜に向かって言う。

「君！ ちょっと髪下ろしてくれない!？」

は？

凜の心境はまさにその一言につきる。

「え？ え、えーと……」

髪が一体何だと言うのだろうか。助けを求めるように凜は女将に視線を移した。

「なんかよう分からんけど、叶えてあげたら？」

事情が呑み込めていないのは女将も同じようだが、今はお客の希望を聞いてあげるべきだと判断したらしい。凜は「は、はい」とどもりながらも、とりあえず男の言う通り、髪を留めていた簪かんざしを

引き抜いた。ストレートの髪がサラサラと流れるように落ち、毛先がストンと胸元にかかる。

男は失せ物を発見したと言わんばかりに、目を見張った。

「やっぱり君か！ 広場で起こしてくれたのは！ 着物だったし、髪を上げていたからすぐに分かんかったよ！」

ようやく凜も、男が何故髪を下ろして欲しいと言ったのか理解した。

あの日は完全にプライベートだったので、装いも洋装。髪も束ねておらず、背中に流していた。髪をきつちりと結い上げ、まして和装までしていれば分からないのも無理はないだろう。

「あの時の子なんじゃないかと思って店に通っていたんだが、格好があまりにも違うから自信が持てなかったんだ。確認しようとしても君は仕事だから、なかなか声を掛けるタイミングがなくてね。しかも僕も仕事を立て込んでいて長居も出来なかったし……どうしたもんかと悩んでいたところだったので、丁度良かった」

これまで二人には会話らしい会話もなかったというのに、男はまるで友達相手にするように軽快に話し出した。つい凜の口も軽くなる。

「じゃあ、やっぱりあの時の超高級スーツの人なんですね」

しまった、と思った時にはもう遅かった。男が怪訝けげんな様子で訊き返す。

「超高級スーツ？」

「あ！ いえ……」

「なんや、知り合い？」

どう誤魔化そうかと凜が焦っていると、女将が首を傾げて口を挟んだ。

「そうであるような、ないような……」

凜も、どう言っているのかよく分からない。知らない人ではないが、知り合いと呼ぶにはあまりにも希薄な関係に思える。

あの時、凜は病気か何かだと思って駆け付けたが、本人はただ寝ているだけだった。恐らく凜があのまま素通りしても、あの藤川という男が発見しただろう。男にとって、凜はただのお節介な通行人という認識なのかもしれない。凜としてはこんなにスーツの似合う男に会えたのだから、ラッキーだったのだが。

その時、男の胸ポケットからまたバイブ音が響いた。

「ちよつと失礼」

男は携帯を取り出すと席を立ち、一旦外に出た。木枠の格子ガラスの引き戸に男の後ろ姿が映る。内容は聞こえないが、何やら話し込んでいる様子だ。深夜だというのに、仕事の電話なのだろうか。

「なんやあの人、凜ちゃんに気ありそうね」

男の様子を窺いながら、心底楽しそうに女将が言う。凜は激しく狼狽した。

「えええっ!? ちよつと待って下さい! そんなわけないじゃないですか! だって、ちよつと顔を見たというか……ほんとそれだけで」

「でもそのちよつとした出会いでも、あの人は凜ちゃんの事を気にしてた。違う?」

長年の接客で養われた観察眼で、女将は何かを感じたらしい。

確かに思い返すと、ちよつとしたという表現では収まらないくらい不思議な出会いだった。何故なら、道端でスーツの男が寝ているのを発見したのだから。男の方がそれをどう捉えているのかはともかく、凜にとってはまさに衝撃的だった。

しかし凜はこれまで男性と付き合った事はおろか、異性の友達もない。急にそんな事を言われても、戸惑いしか生まれなかった。

しばらくして、電話を終えたらしい男がまた店に戻って来た。

「長居してすみませんでした」

その口ぶりから、もう店を後にするつもりのようなのだ。

「かまいませんよ。また来て下さったら」

にこやかに接しながらも売り込みを忘れない女将に、男は少し笑って、「分かりました。それは誓って」と頷く。

「電車大丈夫ですか? タクシー手配とか出来ますけど……」

「大丈夫、迎えがあるから。心配してくれてありがとう」

凜の気遣いに優しく断りを入れると、男は改めて凜の前に立った。慣れた手つきで凜の右手を取り、その甲にリップ音付きの口づけを落とす。そして、意味深に凜と目を合わせ、魅惑的な微笑みを浮かべると、男は「では、また」と言って踵を返した。

凜が我に返った時には、すでに引き戸が閉まった後。

あまりにも唐突、そしてあまりにも早業だった。

「えっ……?」

「ほら、見てみ」

女将おかみの、それ見た事かと言わんばかりの冷やかしにも反応出来ず、ただただ混乱してしまう。ちよっと待って……私まだ、あの人の名前すら知らないんです……! 心の中で訴えてみても、もちろん答えをくれる者などいなかった。

* * *

「お世話になってます! フラワーマリンです。お花、お届けに上がりました!」

次の日の十六時、営業日に毎日花を届けに来る花屋が勝手口のチャイムを鳴らした。

勝手口は引き戸になっている正面入り口とは違い、扉になっている。そのノブを凧が回し扉を開けると、顔なじみの女性店員が頭を下げた。花屋のピンクのエプロンには『フラワーマリン』という文字が大きく印刷されている。

「いつもご苦勞様です」

女性と同じように、凧もお辭儀で返した。

「ありがとうございます。えっと、本日はお店宛てに菖蒲しょうぶが二点と、鈴村凧様宛てに薔薇ばらのブーケを一点お受けしております」

読み上げられた本日の配達物に入っていた自分のフルネームに、凧は眉をひそめた。

「私……ですか?」

「はい」

「女将さん宛てではなく?」

「はい」

「何かの間違いではないでしょうか……?」

決して店員のミスを疑っているわけではないのだが、自分宛てに花が贈られてくるなど、信じられなかったのだ。女将に想いを寄せる人が、綺麗にアレンジメントされた花をよく贈ってくる事はあるが、凧宛てなどこれまで一度もない。

「いえ、ちゃんとここに……差出人、凧智将せいちまき様から鈴村凧様にと……」

何度も確認した凧を不思議そうに見ながら、店員が伝票を差し出した。依頼主欄には、直筆で凧智将也という名前が書かれていた。

「凧智……将也?」

「お知り合いの方では?」

珍しい苗字だった。一度聞けば忘れないと思うが、凧には覚えがない。

「どないしたん?」

その時、凧の後ろから女将がひょっこり顔を出した。

「女将さん」

「あ、いつもお世話になってます！」
店員が女将にも丁寧（おみやげ）に頭を下げた。

「こちらこそご苦勞様です。それより、何かありましたか？」

「いえ、鈴村凛様宛てに薔薇（ばら）の花が届いているのですが、ご本人に心当たりがないようで……」
店員が窺（うかが）うように凛に視線をやるが、本人は首を傾げるばかりだ。

「薔薇の花で……差出人のお名前は？」

女将も眉をひそめて訊（たず）ねる。

「瀬智将也、という方です」

「瀬智さん？ 私も聞き覚えはないわ」

「でもこの方、店宛てに菖蒲（しょうぶ）も送られてますよ？」

「せやったらお客さんやないの？」

女将が凛に確認を取る。

個人名の花だけであれば、それは明らかに凛へ特別な感情があるという事になるが、店にも花を贈っているのであれば、事情は変わる。店員としての凛を気に入っただけなのかもしれない。

「そうなんでしょうか……」

それでも凛の反応は鈍い。

「うーん……まあとりあえず、受け取るとききます」

「あ、はい！ ありがとうございます！」

女将が伝票にサインをすると、女性店員は花を渡し、意気揚々と帰って行った。

受け取った花は、店の中にある花瓶に活けられる。客の厚意で贈られてくるものがほとんどだが、ない日は、フラワー店が花を見繕（みつくろ）って持ってきてくれる。そういう契約を結んでいるのだ。よく店名にちなんだ菖蒲を用意してくれるのだが、季節によってもちろん花の種類は変わる。

「ほんまに心当たりないの？」

「分かりません……」

凛は、困惑しながらも問題の花を見た。薔薇のブーケは、とりあえず開店前のひっそりしたカウンターの上に置かれている。

強烈な赤は、落ち着いた店の中では浮いて見える。堂々と咲き誇り、キラキラと輝いて自分の存在をアピールしている姿に、凛の心は揺さぶられた。しかしひとたび直視すれば、その一枚一枚の花弁に燃えるような情熱を感じて、何故か視線を逸らしてしまう。

「凛ちゃんが知らんうちに作ったファンやったりして。罪な子」

女将が菖蒲を活けながら、面白そうにそんな冗談を飛ばす。動揺を隠しきれない凛とは大違いだ。

「女将さん、何か楽しんでおられません？」

「バレた？」

「バレバレです」

「だって、薔薇って特別な時にしか贈らへんもんやろ？」

それを聞いても心躍るまでは至らなかったが、何故か右手の甲が疼いた気がした。

その日以降、あの男は店にぼったり現れなくなった。しかし、まるで代わりだと言わんばかりに、紅の美しい花が毎日送られてくるようになったのだ。

* * *

道端に寝つ転がったスーツを見つけるといふ奇妙な一件から、一か月が過ぎた。給料日の次の日、半休をもらった凧はいつものように百貨店へ寄った後、ビジネス街に来ていた。そう言えば、先月だったよね。この辺りであの変な人が倒れてたの。

いや、そんなまさか……でも、もしかして。

凧の足はそんな予感から、いつの間にか一か月前のあの場所に向かっていた。

そして――

「また……なの？」

凧はあの日と同じ光景を目にして、呆れ果てる。

やはり男はそこで倒れていた。この前と違ったのは、スーツの柄と、倒れている位置が数センチずれているぐらいだ。

何なのよ！ この人！

いくらスーツが似合っているにしても、こんな珍妙不可思議な行動は許せない。凧の頭の中は、スーツ

への冒険に対する怒りでいっぱいになる。

「すみません！ 起きて下さい！」

この言葉を掛けるのも、もう三度目だ。男の肩を揺さぶる手にも遠慮がない。

「んっ……」

身じろいだ男が顔を上げた。そして寝ぼけ眼で凧の顔を見ると、ふにやりと微笑む。

「これで三度目だね。君に起こされるのは」

男は呑気にそう言った。ふざけているとしか思えない様子に、凧の怒りがピークに達する。

「いい加減にして下さい！ あなたはスーツをなんだと思ってるんですか！」

怒声に驚いたのか、それとも明後日の方向からの叱咤だからか、男は目を瞬かせる。

「スーツって――」

「いいから早く立って下さい！」

「えーと……はい」

凧が急かすと、男は言われるまま素直に立ち上がった。

「ああもうどうして……！」

スーツのひどい有様に、凧はこの世の終わりでも見たかのように、頬を両手で挟み嘆く。そして持っていた鞆からハンカチを取り出した。

「じっとして下さい」

男に一声掛けて、パタパタと砂埃を払い出す。

前の発見時と同様、うつ伏せの体勢だったため、前側が全体的に汚れている。特にひどいのは腕回りだった。ところどころにコンクリートで擦った線が見られる。男が腕を枕代わりしていた所せ為だ。これはもう修復不可能だろう。

「一か月前……初めてお会いした後、店に来られた時、着替えておられませんでした？ あれはスーツが汚れてしまったからですよね？」

ネクタイの汚れを払いながら、凧は質問した。

あの日、男が着ていたのは両方ストライプスーツだったが、この場所で寝転んでいた時と来店時では色が変わっていた。それを見逃さない凧ではない。

「ああ、よく覚えてるね。そうなんだ。藤川……つと、秘書なんだが、彼に言われて着替えさせられた。あの後に商談があったから」

それを聞いて凧は余計呆れた。商談の前にどうやったら地べたで寝るといふ行為に及ぶ事が出来るのか、教えて欲しい。

「……その脱いだスーツ、どうされたんですか？」

確かに、あの状態のスーツで一日過ごすわけにはいかないだろうから、着替えるのは必然だ。それは別に構わないのだが――

「捨てたけど？」

さも当然と言った男の言葉に、凧の手が止まる。そうじゃないかとは思っていたが、本当にその通りだった。

「あ、あなた何考えてるんですか！ あんな高級スーツを捨てるなんておかしいです！ 大体、捨てるぐらいなら寝ないで下さい！」

高い位置にある相手の顔を仰ぎ見て非難すると、男が困ったように眉尻を下げる。

「寝るのは仕方ないんだ。習性みたいなもので……それに、捨てるのも普通じゃないか？ あれ相当、傷入ってたよ？」

「だから！ 地面で寝なければいいんですって！」

「いやだから、それは無理……って、さっきからスーツスーツって言うけど、君、スーツが好きなの？」

凧の身体がビクリと波打った。

気付かれた！

あれだけスーツを連呼しておいて気付かれない方がおかしいが、怒りのあまり我を忘れ、そこまで考えが至らなかった。

「そう言えば、お店で起こしてくれた時も超高級スーツって……」

思い出さなくてもいい事を絶好のタイミングで持ち出され、凧の全身から嫌な汗が噴き出した。

凧のスーツフェチを知っているのは、女将一人だ。その女将にも、秘密にしてくれるよう頼んでいる。恥ずかしいというのもあるが、接客中に客のスーツ姿にいちいち見惚れている、と思われるのは好ましくないだろうという理由もある。つまり凧の一風変わったスーツフェチを知ったのは、この男が二人目という事だ。

「き、気の所為(せい)じゃないですか？」

誤魔化(ごまか)してみたが、明後日(あさう)の方向に泳いだ視線が苦しい。男もそれを分かっているのか、目を細めて詰め寄った。

「……気の所為？」

「ええ。聞き間違い……とか」

「申し訳ないけど、全く誤魔化せてないよ」

男の返事に、背後に断崖絶壁が迫っている錯覚がするほど追い詰められてしまう。

だが、もうどうにでもなれ、と覚悟した凛は、言い放った。

「そうですね！ スーツが好きなんです！ だからこんな所で寝るのが許せないんです！ あなたはスーツに対する礼儀がなってない！」

凛の剣幕に、男はしばらく瞠目(どうも)したままピクリとも動かなかった。だがその内、耐え切れなくなつたのか、豪快に嘔き出す。

「ぶっ……あはははははは！」

高笑いと共に腹を抱えた男に、凛は開いた口が塞がらなかつた。

笑われる理由が分からない。少し変わっているかもしれないという自覚はあるが、凛は至って真面目にスーツを愛好している。だからこそ、この男のスーツへの配慮のなさが腹立たしかったのだ
が……こんなに笑われるのは何故だろう。

「なっ何笑ってるんですか！ 笑い事じゃありません！」

「いや、すまない……どうやら君は……すごく、変わった子らしい」

笑いを堪えながらも、男は「すごく」という単語をあからさまに強めて言う。

「あつ、あなたにだけは言われたくありませんっ！」

お前の方が「すごく」意味不明だ、と凛の握った拳(こぶし)が震える。

「面白いな……君みたいな子は初めてだよ」

「私もあなたみたいな人初めてですよ！」

「そう怒らないでくれよ。僕のは良い意味だ。強烈な印象が残った」

「私も悪い意味で強烈な印象が残りました！」

言い争っているが、要するにお互い様だ。意味に相違はあっても、双方の中に消えない印象が残つたのは確かだつた。

「困ったな……そうだ、とりあえず連絡先教えてくれないか？ 店のじゃなくて、君個人の。目を改めてゆっくり話がしたい」

男が優しい顔で問い掛ける。

「あなたと話すことなんてありません」

「まあそう言わないで」

「嫌です」

「どうして？ 別に携帯番号を知ったからって、悪用したりしないよ。それとも、そんなに僕が嫌？」

俯く凛の顔を男が覗き込んだが、彼女はさらに顔を逸らす。

こうかたくなに拒絶するのは訳があった。

「……持っていないからです」

「え？」

「持っていないと言ったんです！」

パツと顔を上げて、思い切つてそう告げる。

鞆の中どころか、部屋の中を探しても凛の携帯は見つからない。文字通り、持っていないのだ。

「今、持っていないってこと？」

「存在自体ありません」

「ちよ、ちよつと待てよ……それつて、スマホじゃなくて普通の携帯もつていう事……？」

あれだけはっきり明言したのにもかかわらず、男は余程信じられないのか何度も問い掛けてくる。

一体、何回訊いてくるのよ！

「そうです」

力強く断言すると、ようやく納得したららしい男が脱力したように呟く。

「ぜ……絶滅危懼種か……」

捨て置けない台詞に苛立ちを覚えたが、凛はぐつと堪えてそっぽを向く。自分が世間からズレている事は十分に自覚していたからだ。

「何とでもどうぞ。たとえ持つていても教えませんがね」

「どうして持たないの？ ないと困らない？」

男はさらに追及する。こちらの機嫌を窺うように首を傾げられるが、余計気に障る。凛は、男から身体を逸らした。

「うるさいですね。使わないのでいらなだけです」

「店と連絡を取る時に使うじゃないか」

「住み込みで働いているので、定休日と給料日の半休以外は基本、お店から出る事はありません。休みの日でも出掛ける時は、必ず女将さんに告げてから出かけます。時間通りに戻るので、途中で連絡する必要はありません」

凛の生活はほとんど『菖蒲』に費やされている。店は夕方からの営業だが、それまでに仕入れの手伝いや、仕込み、店の掃除などの雑務に追われているのだ。とはいえ、無理して手伝う必要はなく、女将に休みたいと申し出れば快諾してもらえらるだろうが、凛がそれを実行した事はない。

「でも、友達とかと遊んだりしないの？」

次に来た質問に、凛の顔が歪む。

「……あなたには、関係ありません。ほつといて下さい」

先程までの勢いを見る影もなく、凛は弱々しく答える。

「もしかして——友達、いないの？」

躊躇しながら訊ねる男に、凛は凶星を突かれた。

店中心の生活を送っていたので、友達など出来る機会もなかった。店のお客は女将目当ての男性

客が多く、同世代の同性と関わる事が少ない。あえて言えば、あのフラワーマリンの店員とはほぼ毎日会うが、仕事以外の話をした事がなかった。

決して現状に不満があるわけではない。店で働く事には充実感があり、給料もそれなりの額をもたらしている。スーツを見られる環境にいる事も嬉しい。仕事漬けの毎日を送らせてしまっている、と気を遣ってくれる女将に、申し訳なさを覚えるくらいだった。

ただ本音を言えば、友達は欲しい。街を歩いて凧が見惚れていたのはスーツだけではなく、お喋りしながら楽しそうに行き交う人もだった。一緒にお喋りを楽しむ相手がいれば、携帯だつて欲しい。

でも、なんでこの人にそんな事まで指摘されなきゃならないの!?

目頭を集まる熱を振り払うように、凧は失礼極まりない男を振り返る。

「つ……ていうか何なんですか、あなたは！ 大体、私まだあなたのお名前知らないんですけど!?!」

いきり立つ凧とは対照的に嫌味なほど冷静な男は、飄々と「ああ、そうだった」と返す。

「薔薇」

「えっ?」

「薔薇の正体だよ」

その瞬間、凧の脳裏に先日見た伝票の差出人の名前が浮かぶ。

「凧智……将也……」

男の名前を声に乗せると、彼——凧智はこれ以上なくくらいに満足そうに微笑んだ。

「ちよっ、ちよっと待って下さい。本当に……あなた?」

「ああ、そうだよ。覚えてくれたみたいで嬉しい」

「覚えてくれたって……それって、じゃあ、わざと……!」

凧が声を上げると、凧智はあっさりと肯定する。

「もちろん。人間って物忘れの激しい生き物なだけで、記憶にちよつとした新しい刺激が加わった途端、忘れなくなるものなんだって。君には忘れて欲しくなかったんだ。特に接客業っていうのは、たかさんの顔や名前と接する職業だろう? その中の一つにはなりたくなかった」

とても柔らかな話し方でさらりと告げられたが、何かとんでもない事を言われているような気がした。

「でも、どうして私の名前——」

「ちよちよちよと調べればすぐに分かった。と言っても僕は調べるように人に頼んだだけだけど」

「なっ……!」

「悪いとは思っているけど、後悔はしてないよ。結果を得るために手段は選ばないからね」

調べたとは何事か、と怒声を浴びせてやりたかったが、相手のやけに晴れ渡った笑顔を見て、凧は早々に諦めた。この男にはこれ以上何を言っても無駄な気がする。

「……そう、ですか」

「はい。じゃあ、改めて僕の名刺」

瀬智は内ポケットから名刺入れを取り出し、一枚の名刺を凧に差し出した。

「いつでも電話掛けていいからね。お店からでも大歓迎」

こちらは何一つ納得していないのに、瀬智はどんな話を進めていく。

「ちなみに歳は二十九。趣味は……仕事だな。君みたいに面白い趣味じゃなくて申し訳ない」

誰も訊いてないのに！

苛立ちは増すばかりだが、突き返す事も出来ず、凧は渋々名刺を受け取った。そこには瀬智将也の名前と電話番号、メールアドレス、社名、そして『代表取締役副社長』という役職名が記されていた。

「副社長……社長じゃなかったんですか？」

「ん？ どうして社長だと？」

「あ……」

「まあいいや。副社長だけど、実質的には社長と変わらない業務を担っている。色々事情があるんだけど……最近、お店に顔を出せなかったのは忙しかったからなんだ。……あ、女将さん、怒ってない？」

瀬智が心配そうに訊く。先日女将に「また来る」と言ったのに、まだ実行出来ていない事を気にしているらしい。

「それは大丈夫だと思います。ただ近日中に来店された方が、顔を覚えてもらえるとありますが」

「僕は別に、女将さんに顔を覚えて欲しいわけじゃないんだけどな……」

そう肩を落とした男に、凧が首を傾げる。純粋に料理を楽しむにきている客もいるが、女将目当ての男性客はかなり多い。

「うん、でもそうだね。また行かせてもらうよ。ただ、僕の目当ては女将さんじゃない。君だ。それを忘れないで」

私？

凧の心臓が、唐突に大きく音を立てた。

そんなわけないでしょう、と首を左右に振りたかったが、男の真摯な瞳に射抜かれ、身体が硬直する。

瀬智が、凧の首元に垂れる髪をそつとすくい取った。

真つ直ぐな髪はすぐにするりと瀬智の指をすり抜ける。

どうしてだろう。何となく居心地が悪い。凧の心臓は、これまで経験した事のないくらい激しく鳴っていた。

「タイムアップです」

二人の後ろから冷静な声が掛かる。恐らく藤川という秘書だろう、と凧は前回の経験から分かったが、硬直していたので後ろを確認する事が出来ない。

「残念だ」

瀬智はさらりと返し、凧の向こうにいる秘書を一瞥する。そして視線を戻し、両手で凧の両手を

掴んだ。

こ、今度は何!?

男の言動に混乱している凜に、振り解く余裕はない。瀬智に触れたところから熱が広がって行き、見る見るうちに熱いと感じるくらいに体温が上がっていった。

ああ、なんか手に汗が……ってそういう事じゃなくて!

焦っていると、男がふわりと微笑んだ。

「来てくれてありがとう。実はそう思っただけで待ってたんだ。寝てしまったけどね」

「待ってたって……」

「忙しい中、君の行動を予測して、わざわざ寝転んで待ってたんだ。健気だろう?」

冗談じみた言い方で同情を誘っているようだったが、凜は笑顔で返せなかった。この男がどれだけ忙しいのか、店に通い詰めていた時の様子で分かっていたからだ。

わざわざこんな事に時間を割かなくても良いのに。

「普通にお店に来て下されば——」

「でもそれじゃ話せない」

私と話したいって事……?

そんな風に言われたのは初めてで、少し驚いた。

すると後ろの秘書が、「将也様」と棘とげを帯びた低い声音で告げる。

「あー分かった」

名残惜しそうにはあったが、瀬智はようやく凜の手を解放する。凜は急に手のひらが冷たくなつたような感覚に襲われた。

「では、またね」

瀬智は凜に背を向け、さつと歩き出した。

凜が、落ち着きなく帰って行くその後ろ姿を見るのは何度目だろうか。出会った日も入れると、十は超えている気がした。

「あ、あのー!」

「ん?」

凜の呼び掛ける声に、瀬智が足を止めて振り返る。

「あまり……無理しないで下さい……」

凜がずっと伝えたかった言葉だった。勇気を出して言うと、瀬智が心底嬉しそうに顔を緩ませる。「嬉しいな。ありがとう。その言葉でまた無理が出来るね」

いつかの帰りのように振り返らないまま手を振って、彼は去って行った。

* * *

深夜の二時就寝、六時起床というのは、一般的に辛い生活だと思われるだろう。

だが、凜にとってはもう身体に馴染んでいて、むしろ楽しい毎日だ。『菖蒲』中心の生活になっ